



碁

第十一号 平成30年2月13日

「碁」(ご)

#### ◆原作ストーリー

「帚木」「空蝉」の巻を典拠とする。五月雨が降り続く頃、光源氏のところに 頭中将(とうのちゅうじょう)、左間頭(さまのかみ)、藤式部丞等(きとうしぶのじょう)が訪れ、今までの女性との体験談に論議が交わされます。有名な「雨夜の品定め」の場面です。源氏はその仲間から、女性の中でも魅力があるのは中流の女性だと聞き、興味をいただきます。次の夜、**方違え**に宿った紀伊守の中川の家で空蝉に出会い、前日の品定めで心を刺激された源氏は強引に契りを結びます。その後も空蝉に執拗に求愛しますが応じてもらえません。紀伊守の留守を見計らい小君の手引きで忍び込み、そこで御簾の陰から空蝉と軒端萩(のきばのおぎ)とが碁を打つ姿を垣間見ます。源氏は若く官能的な体つきの軒端萩とは対照的でおっとりとした静かな、しかしどちらかというとなりやみに近い小柄な空蝉にますます心を惹かれます。その夜、空蝉の寝所に忍び入る源氏の気配に気づいた空蝉は薄衣を抜け殻のように残して部屋から出ていきます。そこに横たわっていたのは軒端萩だったので…。

#### ◆宗家の語る見どころ

この曲は、長い間廃曲となっていました。昭和37年(1962年)11月23日に二十五世金剛巖宗家により復曲、上演し、平成21年(2009年)相国寺で開催された山口安二郎さんの能装束展の「相賀の能」で、金剛永謹宗家がシテをつとめました。上演機会の少ない希曲であるといえます。さて、この曲は、原作にある源氏と空蝉の恋愛模様を描いたものではなく、空蝉と軒端萩が碁を打つ姿を再現するところがこの曲のおもしろいところです。始まりは、東国の僧が、都の三条京極中川(現在の寺町三条辺り)に到着し、この辺りは亡父が好み口ずさんでいた『源氏物語』に描かれた旧蹟、と思いを馳せていると**花帽子**を被り、水桶を持った尼姿の里女が現れます。僧が素性を尋ねると、この旧蹟を懐かしく思い、昔を思っ姿を現わしたと答えます。里女の碁を打って旅の心を慰めようということばに、僧は空蝉と軒端萩とが碁を打ち遊んでいたことを思い起こし、今宵は誰と碁を打つのかと尋ねます。里女は「その空蝉のあま衣

の」と空蟬の亡霊と明かして姿を消します。中入の後、碁盤の作り物が出され、「急いで碁を打たうよ」と空蟬と軒端萩が碁盤に向かい対局します。ここでは「一手、二手…」 「星目は九曜たり…」 「ねばますやらん…」等、碁の用語がたくさん出てきます。よく耳を澄まして聞いてみましょう。そして「空蟬負けたり」と空蟬は深くシオリます。その後、哀愁を帯びて静かに謡われるうちに空蟬の霊は序之舞を舞って終わります。※方違え…陰陽道で外出するときに 天一神(なかかみ)・金神(こんじん)などいる方角を凶として避け、前夜、他の方角で一泊してから目的地に行く。平安時代に盛んに行われていました。

※花帽子…尼僧や高位の法体が被る、垂れを長くして両肩にかかる形をしています。尼姿の女は犬王(阿弥号:道阿弥)の得意芸でした。

※平安時代、碁は女性が打つものであったようです。

『源氏物語』の中では、第五十三帖「手習」にも対局場面が出てきます。紫式部も碁が好きだったのでしょうか。※星目は九曜たり…碁盤の上に星と呼ばれる九つの天があります。

※ねばま…「はま」は対戦中に盤上の相手の石を取り上げることがをいいます。取り上げた石は、碁笥の蓋を裏返して数がわかるように乗せておきます。「ねばま」は別に隠した「はま」を持っていることから碁の不正な手段。

※シオリ…泣く型で、女は左手の指を眉のあたりに揃えて近づけます。強い悲しみには両手を使うので、注意して観てみると悲しさの度合いがわかります。

